

## 院政期文学の研究史と展望（昭和50年以降）

## 説話文学 竹村信治

整然とした編成と序跋、総目録を整え、更に「竟宴の儀」を催すことで、説話及び説話集のジャンル性の認知を主張した古今著聞集は、自らの先蹤を、「宇縣並相巧語之遺類、江家都督清談之余波」として、院政期の作品である宇治大納言物語、江談抄に求めている。

院政期は、説話が語られ、記録され、集成され、そしてそのような営みに意義が認められた時代であった。宇治大納言物語との関係が取り沙汰される梅沢本説話集・世継物語、江談抄と同じ言談の場（拝承の場）の筆録文獻である富家語・中外抄、法会説経の場にかかわる百座法談聞書・打聞集・金沢文庫本仏教説話集、整然とした仏教類書の成立を窺わせる金言類聚抄、そして今昔物語集、注好選、唐物語、宝物集といった諸作品、また、神仙伝（本朝神仙伝）、往生伝（統本朝・拾遺・後拾遺・三外・本朝新修・高野山）、験記（探要法華験記・地藏菩薩靈験記）類や説話絵巻（信貴山縁起絵巻・伴大納言絵詞）、そのほか説話をふんだんに引く歴史物語（大鏡・

今鏡）、史書（扶桑略記・本朝世紀）、歌字書（俊頼髓腦・奥義抄・和歌童蒙抄・袋草紙・袖中抄）、注釈書（朗詠私注・古今集注など）類、或は伝記（弘法大師行状記・高野大師御伝・上宮聖徳太子補闕記）、古縁起、巡礼記（七大寺日記・七大寺巡礼私記）の類。これは、その「説話の時代」たる院政期の様態を、よく伝えている。

ところで、こうして院政期は説話に関連する諸文芸が産み落とされた時代としてあるが、しかしかようにして残された諸文芸のいちいちについて、われわれは、それほどの長い研究史や多くの研究成果をもっているわけではない。これは、それらの殆どが、今昔物語集、宇治拾遺物語、発心集といった説話文芸の主要作品を対象とし、出典論・伝承論を軸に進んだ研究史のなかで、主要説話集作品の外的成立事情、説話受容態度、或は所収説話の個別的な伝承系統などを説明するための資料として、発掘、再発見されたものであった事情に、おそらくはよつてゐる。そこでは、比較文獻としての資

料性の吟味が行われることはあっても、作品や所収説話の個別的な文芸性評価に検討が及ぶことはあまりなかったように見受けられるのである。その意味で、如上の諸文芸を等しく取り上げて、表現をめぐる文学研究の主題を明確に意識し、いちいちの文芸的達成をといつつ、院政期の説話文芸の総体を明らかにするといった研究は、今後の考察にまつところが大きいと考えられる点、まず確認しておいてよいだろう。

\*

もつとも、発掘、再発見という点では、説話文芸のジャンル自体が、そのような研究史の歩みを歩んできたといっても過言ではない。「平安朝中流以下の風俗習慣さてはその間に行はれし伝説迷信などを知るべきもの」(藤岡作太郎『国文学史講話』、明41)の文言に示される位置付け、民話・伝説の文学的意義を評価しての「世界文学の珍宝」との見解(芳賀矢一『攷証今昔物語集』、大2)、「庶民文学、地方文学、男子文学の新潮流を盛りたる点」の賛美(坂井衡平『今昔物語集の新研究』、大12)、「作者の写生的手腕に負う」[Brutality(野性)の美しさ]の称揚(芥川竜之介『今昔物語鑑賞』『日本文学講座』6、昭2)、そして戦後の歴史社会学派による「中世文学の先駆」との認定。これらは、主として今昔物語集の文学史的评价にかかわるものだが、主要作品を中心に考察が重ねられた説話の研究史にあって、説話一般にも及んだ評価と言ってよいだろう。しかし、かような判断は、いずれも王朝文芸或はそのに描かれる世界との異質性への注目から出発し、この異質性を様々な視点から説明しようとするところにもたらされたもので、いかにも研究情

況を反映しつつ与えられた価値との印象が強い。河内山清彦「今昔物語集成立論の一視点―歌集との関連を軸として―」(国語と国文学、昭42・10)の指摘する「王朝の残響」説、編述主体を「旧体制の担手」と認めて作品生成の必然をとく義江彰夫「歴史学から見た『今昔物語集』」(鑑賞日本の古典8『今昔物語集・梁塵秘抄・閑吟集』、昭55)を得た今日、「異質性」への注目は見直しを迫られてくるべきだろう。

さて、このようにして、説話文芸の研究は新たな価値を与えつつ再評価を繰り返してきたと見られるが、その歩みの背景に、説話作品に対する文学としての認定がいかにして可能かといった模索の営みがあったことは、銘記されておいてよいだろう。評価の変遷は、認定の試みに用いられた視点の軌跡にはかならない。そして、この模索の営みは、それ故に、一方で、平安朝文芸との間の異質性への注目に基づく相対的評価から自立した、説話作品に固有の文学方法の探究をめざす研究をも導いていた。

文学以前のものである「説話」が文学となる契機として「説話的発想」(庶民的平俗性)を説く西尾光一氏(『今昔物語集における説話的発想』文学、昭23)、「口承の文学である説話と文字の文学との出会い」の内に、「人間をその全体的構造において関心の対象としつづけてきた文字の文学」が「説話の中から、さらに自己の要求にかなうものをきびしく選び取り、それに文字の文学の方法で立ち向かう」営みを認め、そこに説話集が文学性を獲得する契機を見定めようとする益田勝実氏(『説話文学と絵巻』、昭35)の見解は、その自覚的な研究史の先駆をなす。前者は「説話的発想」の規定が

やや平板で、「文学」性の判定が主観的評価に基づくこともあって以後の研究の受け継ぐところとならなかったが、説話文学の文芸性が素材や表現の現象的分析だけでは解明できないとの指摘は、今日の基本的了解事項となっている。また、後者は、その後、今昔物語集における書承性や仮名表記文献への依拠の確認（今野達「今昔物語集の成立に関する諸問題」解釈と鑑賞、昭38・1、山口佳紀「今昔物語集の形成と文体」国語と国文学、昭43・8、森正人「大唐西域記と今昔物語集の間」国語と国文学、昭50・12）、或は依拠資料との相即と乖離のうちに形成される表現叙述の模様を「翻訳」と見て今昔物語集の「独自の方法」を探る山根対助（「大日本法華験記の今昔的屈折（上）」国語国文研究、昭34・10）、本田義憲（「今昔物語集伝伝における大般涅槃經所引部について」甲南大学文学会論集、昭41・12、「今昔物語集伝伝資料に関する覚書」『仏教文学研究』9、昭45、など）両氏の問題意識、「翻訳」の間に表現主体の人間観や思考様式と依拠資料との動的な関係を析出する池上洵一氏（「今昔物語集の説話受容態度―その基礎的覚え書き―」法文論叢、昭41・12、「今昔物語集の方法―原話と『今昔』とをわけるとの―」『日本の説話―古代2―』、昭48、など）による「書く営み」への注視などを得て読み替えられ、今日では、依拠資料と説話集とにおける「文字と文字との出会い」、依拠資料に対する編述主体の言語表現による解釈、認識化、秩序化（小峯和明氏の翻訳論、森正人氏の言語行為論）の問題として、継承深化させられている。

小峯（『今昔物語集の形成と構造』昭60）、森（『今昔物語集の生成』昭61）両氏の方法は、形成過程における編述主体の動的な表現行

為を、編纂への視点をそなえつつ解析し、これを通して作品を読み解こうとするものだが、この編纂への注目も、説話作品に固有の文学方法の探究をめざす研究がもたらした視点であった。その議論は、国東文麿氏の『今昔物語集成立考』（昭37、増補版―昭53）に始まり、説話配列の様式の抽出と組織表の提示をここに得て、説話作品は〈集合〉としての在り方が問われ、作品研究は全体性を指向するにいたる。小峯、森の両氏は、配列と組織との関係性に有効な説明を与え得なかつた国東説を批判的に継承して、説話叙述、配列、巻編成の相関の分析の内に、作品の表現を読み取るうとしている。

上は、説話文芸の研究を領導してきた今昔研究史の、文字通り私的な粗描だが、こうして、それは、説話作品に固有の文学方法を追及するなかでその文芸性を見定めて行こうとした歩みを伝える。そして、研究の現在が、翻訳論のかたちをとる表現論、或はこれを絡めて説話〈集合〉としての作品表現を問う方向にあることを教えている。

\*

表現論が翻訳論の形をとり、作品論が、翻訳論を絡め取りながら〈集合〉として形成される作品叙述を読み解くところに目指されているのは、伝承されるものとしてある説話、それらの集積としてある作品の形態といった、対象の特性が選びとられた方法の必然であった。ただ、このような研究の現在が、説話文芸に固有の文学方法を解明しようとした研究史のはじめに、「説話と説話文学」との対立的な問題設定を行い、その「説話文学」を説話集作品に認める前提を立てたところに導かれたものであることは指摘されてよいだろう。それは、説話集研究を尖鋭化させ、主要作品の作品論を可能に

させたが、一方で説話一般の文芸性への問い掛けを置き去りにしてきたと観察される。依拠資料からの「翻訳」の営みを説話集作品の形成の議論に収束させることは、結果的に収束させえない側面を矛盾ととらえさせ、「翻訳」による語りの豊かな達成を一面化する。矛盾を形成の動因とするのは言葉のあやにすぎない。むしろ、〈集〉としての作品表現に背馳して「矛盾」を抱え込みながらも語りの形成に向かう説話の様態を、説話の文芸性への問い掛けに即して見定めることが肝要であった。また、説話集の作品表現についても、それを際立った徴表の抽出からの演繹法によって一元化してとらえ、その検証に矛盾を指摘したり、内的不成立を説くのではなく、説話の集積をとおして成立する説話集作品の表現性が、いかなる文芸観、文学方法にささえられ、どのようなありようを指向するものとしてあったかという課題に答えつつ、作品表現における徴表の意味を問いただす必要がある。院政期文学としての説話文芸の検討——それは、主要説話集作品の文芸性を問いつけてやや硬直した研究の現在を相対化し、説話と説話集の文芸としての成立の根源をたずねてその表現性の在り方を見極め、新たな研究の地平をきり拓く試みにほかならない。

\*

説話文芸に固有の文学方法を求めて、説話が説話文学となる契機を「口承の文学である説話と文字の文学との出会い」に見出した益田勝実氏は、しかし説話についても、そこに固有の文学方法を認めていた(同上書)。「簡潔な行動本位の描写」「話の筋の洗練された展開」「その伝承圏に属する人々の共通の知識や関心に支えられ

ている面」といった指摘がそれで、説話文学は、「文字というより公的なものを通して、人々の生活と密着融合してしまっている話の基盤と話を一応切り離し、そこに独自な独立した話の文学の世界を築こうとする」ものと説明される。ここには、説話を共同体の文芸、説話文学を非共同体的な或は共同体を超えた社会的な文芸とする図式が見えていよう。けれども、この図式は、院政期の説話情況の実際とはややずれている。院政期が「貪婪な知識欲とその集積の流行した時代であった」との見解(大隅和雄「古代末期における価値観の変動」北海道大学文学部紀要、昭43・2)や、俊頼髓腦などの歌学書に仏典に見られる話題や中国故事が注釈として引かれたり、それらを詠作上の源泉としている事実(小峯和明「俊頼髓腦」月のねずみ考)中世文学研究、昭55・8、同「俊頼髓腦」と中国故事」中世文学研究、昭57・8)、また、法会、歌会、拜承の場できかんに説話が語られたことを伝える聞書、記録、注釈書記事の存在。これらは、説話が「固有の棲息圏」を抜け出て共同体のエリアを拡大し、社会化していった様相として理解することが可能であろう。そして、それらは人々の知識に組み込まれ、いわば知の共同体にやがて再生を遂げたと考えられる。院政期の説話作品は、この知の共同体への再生の過程に、或は再生の実現を背景に語られたものとしてあったと見るべきではなかったか。

さて、院政期の説話情況をこのように窺うとき、そこに再生される説話は、生成された折に担っていた意味を後退させ、人々の「読み」の営みの前に引き出されることになったと見られよう。院政期歌学における本説創造の営みに、既成の伝承を付会する場合が指摘

されていることは、この間の事情をよく説明する（小川豊生）『俊頼髓脳』の歌語と説話―〈異名〉からの接近―』日本文学、昭61・10、同「院政期の歌学と本説―『俊頼髓脳』を起点に―』日本文学、昭62・2。「読み」への解放が多様な意味を發見させ、付会を可能にしたのである。ただ、このことは、人々の「読み」への意欲とも無関係ではない。院政期における注釈の成立について、その因を平安朝文学との「読み」の断絶に求める見方が一般的だが、これは、裏返せば、あらたな「読み」を開拓する営みのあらわれともみなせよう。森正人「打開集本文の成立」（愛知県立大学文学部論集、昭57・3）は、打開集に認められる誤写から形成された説話の語りを、「書写者の読み」を介した「いま一つの創造行為」と指摘している。すなわち、「読み」への意欲はそのまま表現への意欲につながっていた。小稿冒頭に示したような、院政期における説話関連諸作品の輩出は、この「読み」の解放を背景とする表現の解放がもたらした様態と理解することができる。

こうして、院政期は「読み」の時代である。説話の文芸性は、この説話情況を踏まえて議論されなくてはなるまい。伝承論、受容論を踏まえた「翻訳」論は、この「読み」の時代の「踏え替え」の営みに焦点をあてたもので、益田氏の「すでにある文学の方法で貫かれていた伝承としての現実的存在に、自己を対置させて行う文字による文学創造」（同上書）といった見方もそのひとつであろう。だが、説話がそのような「読み替え」を重層させて現前する構造体である以上、説話集作品に採録される際の一回的な「読み替え」を探り当てて作品論への収束を急ぐだけではなく、重層する「読み」と

表現をときほぐし、その累層的な全体に説話の表現性を求めることも必要であろう。むしろ、そのような表現性への問い掛けこそが、〈集〉としての作品表現に背馳して「矛盾」が指摘される説話の語りをよく説明するように思われる。かような視点にたつ論考として佐藤晃『宇治拾遺物語』第五七話の形成―説話形成論の試み―（説話・伝承学会編『説話と思想・社会』昭62）があるが、院政期の説話文芸についても、池上洵一氏の、重層的な構造体としての説話の各層を一枚一枚がして深層にもせまる手法に多くを学び（『今昔物語集の世界―中世のあけぼの―』昭58、藤原山蔭説話の構造と伝流」『講座平安文学論究』4昭62、など）、それを説話の累層的な表現性の解明に生かしていく努力が求められていよう。

院政期を「読み」の時代として認定し、説話が様々な「読み」の試みを経て知の共同体に再生されていったということができるとすれば、説話の文芸性の問題として、そのような共同体に支えられて成立する表現性への課題も、考察されるべきであろう。これは、すでに、益田氏の「抄録の文芸」として古事談を読み込む一連の論考（『古事談鑑賞』解釈と鑑賞、昭40・5/41・4）や、宇治拾遺物語における説話配列の連なりを説明しようとする諸論（三木紀人「背後の貴種たち―宇治拾遺物語第一〇話とその前後―」成蹊国文・昭49・2、小出素子「宇治拾遺物語の説話配列について―全巻にわたる連関表示の試み―」平安文学研究、昭57・6、など）に窺える視点で、その意味では、特に院政後期の作品群を対象とする検討が有効かもしれない。今鏡での話題の語り方（美福門院得子の鳥羽院入内の経緯を語るくだりと源氏物語、藤原忠実と師子との結婚の話題と

術婆伽説話、真福田丸説話との相関、など)、或は、説話作品ではないが、藤原隆信朝臣集の恋部所収歌及び詞書に見る伊勢物語諸段との響き合い(樋口芳麻呂「藤原隆信の恋」国語と国文学、昭50・2)などは、確かに知の共同体を基盤に成立する表現のありようを伝えている。近年の唐物語に関する諸論はこの視点に立つ貴重な試みのひとつであろう(小峯和明「唐物語の表現形成」『和漢比較文学叢書』4、昭62、同「唐物語小考」中世文学研究、昭61・8、増田欣「唐物語の世界―蕭史と弄玉―」国語と国文学、昭62・9)。可視的な関係性に目をとどめるだけではなく、話型論、モティーフ研究(国東文麿「説話モティーフ集の試み」―日本古典文学全集「今昔物語集」三月報三七、昭49・7―に研究の一端が紹介されている)、昔話研究での構造論的成果をも組み込んで視点を拡大し、知の共同体の中身を検証しつつ、そこに目指されている文芸的興趣の實際を、説話集編纂の方法としてではなく、説話の表現性の問題として正しくとらえてゆかなくてはならないだろう(山本節「源光の説話」文学、昭58・24など)。

知の共同体の中身の検証が、院政期の思想(宗教)、文化、社会の諸情況を視野に収めながら行われなくてはならないことはもちろんだが(そのような視野をそなえて作品の表現性に切り込んだ労作として本田義憲氏の今昔物語集「解説」―日本古典集成『今昔物語集』一・二、昭53、54―がある)、とりわけ、説話が実際に用いられた、語られた事例の検討は、何より有効にちがいない。和歌の本説、漢詩文学作品(願文、表白文を含む)に踏まえられる故事、また、江談抄、富家語、中外抄などの承承の場の筆録文献、百座法談

聞書といった法会の聞書、日記類の記事、歌学書にみられる歌会等での論義雑談の引用、そして注釈書類など、ひろく諸分野にこれを窺う資料をもとめ、その全体を明らかにする必要があるだろう。

ところで、これらの、知の共同体への説話の再生状況を伝える資料のうち、言談の場の記録は、さらに、説話の語りの分析や説話集における話題の連なりの問題を考える上でも貴重である。その有効性は、益田(「話の生熊」解釈と鑑賞、昭34・6、「貴族社会の説話と説話文学」解釈と鑑賞、昭40・2など)、小峯(「江談抄の語り―言談の文芸―」伝承文学研究、昭57・6)、また池上(「話題の連関―「中外抄」「富家語」私記―」甲南国文、昭57・3、「口承説話における場と話題の関係―「玉葉」の記事から―」語文、昭59・6)の諸氏によって既に証明済みであり、かような実体的な場の様態の分析をおして、「物語の場」たる説話集作品の文学方法や表現性の内実は見通されてくるであろう(「物語の場」を考察した論考には森正人氏の「堤中納言」このついで「論」愛知県立大学文学部論集、昭55・3、「場の物語・無名草子」中世文学、昭57・10がある)。

それはおそらく、場(作品の枠組み)の規制を受けながら営まれる語り手(編述主体)の連想を本質とする。そして、聞き手(享受する側)のうちに成立する、連想によって導かれた話題相互の、累層的な説話の表現性を背景とした響き合い、読み替え合い、或は共有される知識を媒体とする「読み」の増幅運動を内容とする。このような見方に立つ考察は、宇治拾遺物語を中心にいくつかあるが(西尾光一「『宇治拾遺物語』における連貫の文学」清泉女子大学紀要、昭58・12、荒木浩「異国へ渡る人びと―宇治拾遺物語論序説―」国

語国文、昭61・1、小峯和明「世俗説話集の語り―宇治拾遺物語」を中心に―日本文学協会編『日本文学講座3』、昭62など、「読み」の時代の先駆けをなす院政期の説話文芸についても、研究者主体の「読み」を軸として、試みられてよいであろう（土方洋一「封じられた寓意―今昔」世俗説話一面―国語と国文学、昭62・2、前田雅之「今昔物語集天竺部卷五の構成―排列意識と連想意識―」国文学研究、昭62・6は、その可能性をさぐる試行とみなされる。

\*

説話文芸の研究史は、先にもみたように、説話に対する文学としての認定がいかんにして可能かという問いを問いつつた歩みとしてある。ここでは、文学以前の地盤的性格が指摘されるなかで、これを文学として指定するために、視点が拡大され深められ、方法が開拓されてきたように思う。今後の検討にまつところの大きい院政期説話文芸の研究は、かような根源的な問い掛けと視野の広がり、方法論の練成の姿勢に学び、これを継承発展させるものでなくてはならないだろう。そして、文学であることを自明のこととして分析の視点を拡散させるのではなく、どのようにして文学たりえていっているかをなお問うてさらに資料を発掘、再発見し、それを通じて生成の背後にある思想、文化、社会の諸情況に視野を広げ、これらと深くかわりつつ生成される表現性の解明を目指さなくてはなるまい。

以上、院政期の説話文芸に関する研究情況と今後の課題を略述したが、粗雑な情況把握と偏頗な問題意識は、重要な研究史的問題を理解させず、諸先学の貴重な指摘を曲解させ、見落とさせていることと思う。大方の御宥免とご教導をお願い申し上げる次第である。

なお、小稿の欠を補う研究の手引きとして、研究史研究展望の論考に、池上洵一「今昔物語集・古本説話集・打聞集」（別冊国文学・日本古典文学研究必携、昭54・11）、同「今昔物語集の方法と構造―卷二五〈兵〉説話の位置―」の「原点の確認」節（日本文学協会編『日本文学講座3』、昭62、森正人「レポート・論文を書く人のために―今昔物語集」（国文学、昭59・7）、同「日本の説話・説話集研究の混迷と拡散のなかから」（説話・伝承学会編『説話と思想・社会』、昭62）、小峯和明「今昔物語集の研究史（昭和三〇年以降）」（解釈と鑑賞、昭59・9）、同「説話文学研究の三十年」（中世文学会編『中世文学研究の三十年』、昭60）、同「今昔物語集と宇治拾遺物語―説話と文体―」解説（日本文学研究資料新集6、昭61）があり、文献目録に、林雅彦編「説話文学研究文献目録」（解釈と鑑賞、昭59・9）、大村誠一郎「今昔物語集研究文献目録」（講座平安文学論究）4、昭62）がある。あわせ、御覧頂きたい。また、昭和五十年代の今昔物語集研究及び説話文学研究をリードした小峯、森両氏の著書（上掲）についての書評が、今成元昭（中世文学研究、昭61・8）、前田雅之（解釈と鑑賞、61・9）、本田義徳（国文学研究、昭61、10）、森正人（伝承文学研究、昭61・10）、池上洵一（日本文学、昭61・11）、国東文磨・他「早稲田大学学位論文（博士）審査要旨」（早稲田大学広報・号外一七六九号、昭62・7）（以上、小峯氏著書）、小峯和明（伝承文学研究、昭61・10）、荒木浩（愛知県立大学説林、昭62・2）、前田雅之（国語と国文学、昭62・6）（以上、森氏著書）の諸氏によって示され、研究展望にも便宜を与えていることを付記しておく。

〔たけむら・しんじ 福岡女子大学助教授〕